

---

Who killed him ?

要徹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Who killed him ?

### 【Nコード】

N2880P

### 【作者名】

要徹

### 【あらすじ】

手袋がなくなった。

たったそれだけのことで始まった、殺人事件。それはホームレスによる犯行と思われたが、その事件の裏には幾つもの影が潜んでいた。

その影とは誰か。

一体、誰が彼を殺したのか。

誰が殺人に及ばせたのか。

四人の人物を通して描く、とある殺人事件の裏側。

誰が、誰を殺したのだろう。  
。

？ 冬廣瑛二（１）（前書き）

一作目『黒い咆哮』、二作目『君へ「ありがとう」』に続く三作目となります。今回までが書きためていた作品で、次回連載作品より書き下ろしとなります。

前作でもお伝えしましたが、作者の僅かながらの成長を感じてもらえればな、と思います。

？ 冬廣瑛二（1）

1

身を貫き、脳の機能をも停止させてしまうような酷寒の中、張りつめた空気を身にまとって、冬廣瑛二ふゆひろ えいじは川原を探索していた。ある親友から、綺麗な石が川原に落ちているという情報を聞き、その場を目指してひたすらに歩く。

だが、その場所は担任から近づかないように、との忠告を受けている。けれども、それを無視してでもそこへ向かう価値はあった。本当ならば、情報提供してくれた親友も一緒に来るはずだったが、待ち合わせ場所にいつまで経っても現れないので、一人で先に目的地へと向かうことにした。

枯れたススキ、褐色の大地、セピア色の風景、薄く氷の張った川、夏はあれだけ生い茂っていた雑草たちも、今では寒さで小さく背を縮めている。夏と冬の自然が見せるギャップが瑛二は好きだった。時刻は十六時。まだまだ遊べる時間だ。しかし、夕陽は赤く燃え、鳥たちは家路に着こうとしている。もうしばらくすれば、世界は闇に支配されるだろう。

瑛二は道端で拾った棒きれを振り回して、枯れた草をびしびしと叩いていった。もちろん、これに意味はない。無意味な行動をするというのは、人間特有のものだ。

つい最近、音楽の授業で習ったばかりの『翼をください』を陽気に口ずさみながら、どんどんと下流にある目的地を目指していく。

川にかかる橋の上を電車が通過する。ごうごうと不快な音をたて、

奴隷たちを家へと送り届けている。僕は立派な大人になろう、など  
と思いながら歩き続ける。そこから更に進んでいくと、大きな橋が  
緩い弧を描いてかけられていた。橋の下にはブルーシートのかけら  
れた小屋のようなものがあり、ただならぬ気配を感じた。恐怖とも  
不安とも似たような何かの。

周囲に階段はなく、堤防を歩いていくことはできないし、さつき  
通過した橋は車道で、歩行者のためのものではなかった。まるで、  
ここは密室のようだった。瑛二は早くそこから立ち去りたかったが、  
そこが目的地であることに気づくと、少し戸惑いながらも搜索を始  
めた。

しかし、あまり時間がなかった。あまり遅く帰宅すれば、母親の  
雷が降ってくる。それだけは避けたかった。いくらプレゼントを用  
意したとしても、きつと埋めきれないだろう。けれども、そんなこ  
とはお構いなしに瑛二は周囲を散策した。石がよく落ちていているとい  
う草むらに入り込み、棒で草をかき分ける。瑛二は宝探しをしてい  
るようで、胸がわくわくした。

しばらくの間、草むらの搜索が続けたが、見つかったのは空き缶  
と、古ぼけた雑誌だけだった。唯一、その雑誌に興味湧いたが、  
持ち帰るわけにはいかなかったので、その場に捨てた。

「場所、間違えたのかなあ？ あいつがいれば、分かるのに」  
ぶつぶつと独り言を言いながら、橋の下のベンチに腰掛けた。

知らぬ間に、闇が空を侵食してきている。そろそろ帰らねばなら  
なかったが、そこでしばらく休憩することにした。決して母親が恐  
ろしくないわけではなく、ただ純粹に疲れていたのだ。腹も少し空  
いてきている。さつきから、腹の虫がうるさくてかなわない。

瑛二は黄色い手袋を取り、小さなリュックの中から水筒を取り出した。そして熱い液体を注いで、ゆっくりと飲んだ。ほうじ茶だった。これは瑛二が出掛ける前に母親が用意してくれたものだ。

瑛二の母親、冬廣<sup>まどか</sup>麻都香は、確かに怒れば鬼のごとく恐ろしいが、普段の彼女は本当に暖かい優しさをもった母親だ。さっき瑛二が外した黄色い手袋も彼女の手製のものだったし、それどころか着るものまで手作りだ。彼の母親が作るものは、既製品と比べても遜色のないほどに、クラスで自慢してしまうほどによくできていた。クラスの一部の人間からは、自分も欲しい、というような声も出てきている。

しかし、何も好き好んで手作りのものを着けているわけではなかった。既製品を買う金が存在せず、やむを得ずに手作りするしかなかった、というのが正直なところだ。

瑛二には、収入の要である父親がいなかった。

数年前に、家庭は父親によって崩壊させられた。父親は女癖が悪く、いつも麻都香と瑛二を泣かせてばかりいたし、浮気だけにはとどまらずにギャンブル、DV、つまり家庭内暴力も絶えなかったと、瑛二は母親から聞いていた。瑛二には、父親の記憶はない。

それに耐えかねた麻都香が離婚届にサインするように父親に迫るが、夫は受け入れなかったため、裁判にかけた。そして、結果として離婚が成立した。

だが、麻都香の苦労はそこでは終わらなかったし、むしろ以前よりも酷くなった。今まで父親頼りだった収入もなければ、今まで受けられていた保険も、何もかも失ってしまった。三十を過ぎた彼女に就職先などあるはずもなく、パートタイマーとして日々をしのぐ生活を送ることになってしまった。これならば、暴力を受けていた時期の方が安定感があった。子を守るためには、それは耐えるべきだったのかもしれない。

瑛二は、そんな母親の後ろ姿をずっと見てきた。そのために、瑛二は一切我が儘を言わなかったし、何かを買ってくれとねだることもなかった。現代の子供の娯楽といえば、ゲームだとか、パソコンを用いたものが主流となっているが、瑛二にはそんなものは無縁だったし、そんなものを買ってみたいなんて考えたこともなかった。やはり、外でこうやって遊んでいる方が　たとえ孤独であったとしても　楽しかった。その点では、とても手間のかからない少年だった。

それに、この生活が始まる前には暴力を受け、今は朝早くから仕事に向かい、夜遅くまで馬車馬のように働いている麻都香に、口が裂けてもゲームを買ってくれだなんて、そんなことは言えなかった。このように働き続けることが人間の生きる意味なのだとすれば、本当に無駄な存在だと思う。生きるために死ぬようなものなのだから。

少し苦めのほうじ茶を飲み終え、水筒をリュックの中にしまいこんだ。瑛二が目を細めて遠方を眺めると、ゆっくり夕陽の沈んでいく姿を見ることができた。根元の方がゆらゆらと動き、とても幻想的な雰囲気だった。結局発見することのできなかった綺麗な石の代わりに、帰ったらこの光景を教えてあげよう、と心に留める。

夕陽の半分以上が恥ずかしそうに隠れてしまった頃、後ろに気配を感じた。

重く、鈍く、どす黒い何かの。

瑛二の目の前に長い影が伸びてきている。瑛二の肩に皮の厚い手が置かれる。



「こんな時間まで遊んでちゃ駄目じゃないか……」

振り向くと、そこにはぼろぼろの布をまとった男が立っていた。恐らく、橋の下の小屋に住んでいるのだろう。男は髭を夏の川原に生える雑草のように生やし、肌は浅黒かった。その体から放出されている臭いもひどい。彼は恐怖感を覚えるような出で立ちで、ずっと見ていると泣きそうになるが瑛二はぐっと堪える。瑛二の中にある記憶が、彼を拒んでいるようだった。

「ごめんなさい、僕もう帰りますから」

リュックを背負って、大切な手袋を着けて足早にそこを去ろうとする。しかし、またも男に肩を掴まれ、その場に倒されてしまった。背負っていたリュックのおかげで、あまり衝撃はなかったが、冬場のコンクリートは冷たく、瑛二に更なる恐怖を抱かせた。

瑛二は小動物が猛獣に怯えているかのような目で男を見やると、男は笑って、犬歯を鋭く光らせた。

「誰も帰りなさいなんて言っていないだろう？ どうだい、少し遊んでいかないか？」

男の笑みは、紛れもない偽物だと瑛二は勘付いた。子供というのは純粋な心を持っているがゆえに、真実を見抜く力を持っている。

今、男の笑顔の裏に明らかな悪意を感じた。

「お母さんに怒られちゃうんで、ごめんなさい」

服に付着した土ぼこりを払い、小さく頭を下げる。しかし、男は納得する様子もなく、誘い続ける。

「いいじゃないか、ちよつとくらい。一人で寂しいんだよ。ね？」

リュックに手を引っかけ、瑛二を逃がすまいとしている。

「離してよ！ 門限過ぎちゃう」

瑛二は男の手を払いのけ、睨みつけた。その目が気に食わなかったのか、敬語を使うことをやめたことが不愉快だったのは分からないが、男の表情が豹変した。悪意を内包した笑顔から、殺気をまとった形相へと。

「おい、俺が寂しいって言ってるんだよ。ちょっとくらい一緒にいてくれてもいいじゃねえか。そんなに麻都香が好きか！　なら、とつとと帰りやがれ！」

今までの温和な口調とはうってかわって、ものすごい剣幕で瑛二を怒鳴りつけた。今日まで母親くらいにしか怒鳴られたことのなかった瑛二は、その迫力の違いに驚愕し、急いでリュックを背負って無言で走り去った。

なんで母さんの名前を知っていたんだろう。

？ 冬廣瑛二（2）

2

電車が通っていた橋のあたりまで来て、やっと瑛二は足をとめた。息が切れて、気持ちが悪かった。嘔吐しそうな気分になりながらも、瑛二は冷静になろうとした。

口から白く色づいた吐息が吐きだされる。

時刻は何時だろうか。すっかり日は落ちて、やかましく啼き続けたいた鳥たちの声も聞こえない。それどころか、人の気配すらも消え去り、電灯も存在しない河原はひどく気味が悪かった。気温も下がってきており、瑛二の体温を奪っていく。

手を口の前に持ってきて息を吐き、わずかな暖をとる。

と、その時。瑛二は何か足りないことに気がついた。

「あれ？」

思わず口に出してしまうほどだった。瑛二は暗闇の中でリュックを下ろして中を探ってみたが、水筒と懐中電灯しか入っていないかった。瑛二は、黄色い手袋の右手側を失くしてしまっていた。あの男に怒鳴られたあの時だろうか。

あの手袋は、多忙な母親の愛情が詰まった大切なものだ。それを失くしてしまうなんて、僕は馬鹿だ、などと思いつつ後悔の海に沈んだ。手袋は取り返したい。だが、あの男にもう一度顔を合わせれ

ば一体何をされるか分かったものではなかった。それに、あの男のいた場所で手袋を失くしたとも限らない。走ってきている最中に落としたかもしれないのだ。

瑛二の額に汗がにじみ出してくる。寒いはずなのに汗をかくなんて、人間という生物は本当に面白いと思う。

リュックの中に入っていた懐中電灯を手にして、瑛二は通った道の搜索を始めた。

まず枯れ果てた草むらに入り、丸い光をくまなく当てていった。スポットライトのように照らされた部分は、誰も楽しませる気のないステージのように殺風景だった。そのステージに、黄色い手袋の姿はない。あっちこっちに視線をやっては、部分、部分を凝視していく。しかし、どこにも落ちてなどいなかった。

寒さは夕方よりもさらに厳しくなり、瑛二の運動機能を徐々に奪っていく。手袋を着けていない右手がじんじんとする。

懐中電灯を持っている右手にほとんど感覚はなく、牡丹色にかじかんでいた。そういえば、手袋を買ってもらった狐の話を学校で習ったな。確か『手袋を買いに』だったっけ。

そんなことを頭の片隅で考えると、少しだけ笑いが込み上げてきた。何が楽しいのか、何が笑いを起こさせるのかはまったく理解できなかったが、ただただ愉快に感じた。

北風が瑛二の頬を打ちつけるので、瑛二はコートの襟を立てて手袋を探すことにした。こうすると、幾分か頬に刺さる風はましになった気がした。けれども、鼻の奥に鋭い風が入り込むと、皮膚に棘が突き刺さったように不快になった。あまりその風を吸い込まない

ように、ゆっくりと息をする。

しばらくの間草むらを探し続けたが、やはり手袋は姿を現さなかった。黄色という配色から目立つことは確かだが、この暗闇のせい、中々見つからない。

徐々に、徐々にあの男のいた橋が近づいてくる。瑛二はそれが嫌で嫌で仕方がなかった。だからか、あの男に近づくまい、絶対にここに落ちているはずだと、根拠ないことを考えて近づかないようにした。だが、瑛二の苦労は無駄だった。瑛二の願いに反して、愛しい手袋は姿を現さなかった。

瑛二は、小さくため息をついて決心した。男の元まで、搜索範囲を拡大するのだ。そこで見つからなければ、母親に泣いて謝ろうと思った。それほどまでに、あの手袋は大事なものののだ。

ゆっくり、それでいて着実に橋が近づいてくる。大きく威圧感を覚えるその風貌は、まるで巨人のようだった。大きく開いた橋の下は口に見える。巨人の口へと辿りつくと、瑛二は明かりを小屋の方に移したが、何の反応もなかった。そこに男が佇んでいなかっただけで、瑛二の心は幾分か安定した。今まで怯えていた自分が馬鹿みただった。

橋の下には数個の街灯が取り付けられていたので、懐中電灯は不要だった。

電源を切り、気を取り直して、手袋の搜索を始める。座っていたベンチから、小屋の近く、そして行ってもいない橋の向こう。ありとあらゆる場所を探し、残すところはベンチの目の前にある草むらだけとなった。もうここに存在しなければ、手袋はあの世にでも旅立っていることだろう。

草むらに入ろうと、気合を入れ直した時だった。背後に重い気配を感じた。

「おや？ おじさんが恋しくなったのかな？」

あの男だった。大きく口元を歪ませて瑛二を見下ろしている。ここで怯んでは元も子もないと感じた瑛二は、意を決して訊ねてみることにした。

「あの……。僕の手袋知りませんか？」

「どんなのなんだい？」

どうやらさっきのことは気にしてはいないらしく、にこやかな表情で瑛二の話を聞いていた。しかし、裏で何を企んでいるかなんて分かりはしない。

「これくらいの大きさで、色は黄色なんです」

ジェスチャーで大きさを示すが、実物を差し出した方が早いと思い、左手にはめていた手袋を男に見せた。

「これが」

「はい。さっきここで落としたと思うんですけど」

まじまじと黄色い手袋を見つめて、男はしきりにうなずいている。決して、それは意味のある行動とは思えない。それでも男はそれをやめなかった。

「どこかで見た気がするなあ」

「どこで！ どこで見たんですか！」

「思い出すから黙ってる」

また男は考えるふりを始めた。だが、瑛二は純粋な気持ちで男の回答を待った。寒さと恐怖、そして焦燥感から、震えが止まらな

った。一刻も早く帰宅して、きつと心配しているであろう母親を安心させてやりたかった。

「思い出したぞ！」ぽんと手を叩き、男はうんうんとうなずいた。

「あの黄色い手袋は、あそこで見かけた」

「え？」

男が小屋の方を指さす。そこでは、一斗缶が暖かな光を放ち、こつこつと炎が燃え盛っていた。暖房代わりだろう。それを見ても意味の解らなかった瑛二は、さらに問いかける。

「どういことですか？」

「頭の悪い子供に育ったもんだ。あの一斗缶の中だよ。ほら、よく燃えてるだろう？ 感謝してるぜ」けらけらと男が笑う。「本当によく燃えてやがる」

体中の血液が沸騰し、そのすべてが頭に昇ってくるような錯覚に瑛二は襲われ、冷たかったはずの体が異常なまでに熱く感じられ、その時、間違いなく、瑛二は怒りと強い憎悪に染められていた。

「殺してやる！」

そう叫んだ次の瞬間には、その小さな拳で男を殴りつけていた。

何度も、何度も、何度も。

小さな体にあるすべての力で、男を憎しみと怒りに身を任せて殴り続けた。その姿はまるで猛り（たけ）狂う（くる）獣のようだった。

た。しかし、子供の力というものは程度が知れている。次は男が瑛二に馬乗りになっての反撃が始まった。今度は瑛二が一方的に殴られる側となり、何度も意識が飛びそうな感覚に襲われた。

固く、重い拳が頬骨に打ちつけられ、息をすることがやっとだった。瑛二の体から、徐々に力が抜けていった。視界がかすみ、この世の終わりが見えた。

お母さん、お父さんからこんなことされてたんだ……。

と、その時。小屋の付近に円形の光があてられた。

涙と血液でぼやけた風景の中には、紛れもない母親、麻都香の姿があった。そして、その傍にはニット帽を被った男がいた。男と麻都香が何やら叫んでいるように見えるが、意識の薄れている瑛二には聞きとることができなかった。

きつと、僕のことを怒ってるんだ……。

ニット帽の男は、瑛二の上に乗っている男を引きはがし、数発殴った後に彼を羽交い絞めにした。瑛二を殴っていた男が何やらこちらを向いて叫んでいる。

羽交い絞めをしている男は、隣家に住む東岸敦司とうがん あつしであると気づいた。どうやら、麻都香が瑛二のことを心配して協力してもらったらしい。

麻都香が大粒の涙を流しながら瑛二の元へ駆けつけた。

「エイちゃん！」



瑛二の視界にくしゃくしゃになった母親の顔が映る。普段見ている明るい笑顔でなかったことに、瑛二は少しの戸惑いを覚えた。薄い紅色をしているはずの頬も、綺麗に整えられているはずの髪も、すべてが瑛二の知っている麻都香ではなかった。

「エイちゃん。何でこんなことに……」

片手で瑛二の頭を持ち上げ、膝の上に置いた。そして両手で口を覆い、大きな声で泣き始めた。

「……お母さん」

やっとのことで、瑛二は口を開くことができた。上手く声を発することができないので、ゆっくり、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「ご、めんね。手袋……失くしちゃった」

力なく、鯉のようにぱくぱくと口を動かしている。口元にはどす黒い血液が付着していて、その周囲は青紫色をしていた。相当な力で殴られ続けたのだ。

「そんなの、どうでもいいじゃない……」

「どうでも良くななんてない　母さんの作ってくれた大事な」

視界が前にも増してぼやけてくる。

「大事な手袋を燃やされたんだっ……」

瑛二はもうあまり残っていない力を振り絞り、麻都香の手を握った。

麻都香の頬に付着した涙が凍りはじめていた。鼻水を垂れ流し、

必死に瑛二を慰めようとしている。

「エイちゃん……こんなに手、冷たくして……」

麻都香は瑛二の右手をそつと両手で包みこみ、額をあてた。冷たく冷え切った瑛二の手は、死人かと間違ってしまいそうになるほどに体温が存在しなかった。

「手袋なんて、お母さんがまた作るから。だから、早く病院行って、元気になるうね」

麻都香は、瑛二の手をより一層強く握った。

「うん……ありがとう、お母さん」

その言葉を最後に、瑛二の意識は途切れた。

羽毛のように優しく、シルクのようになめらかな手で握られた右手は、毛糸の手袋をしている左手よりも暖かく、彼女に手を握られていると、それだけ救われる気がした。

雪が、二人の頭上で乱舞している。

瑛二は、麻都香の温かな手をぎゅっと握り続けた。

？ 冬廣麻都香（１）

1

瑛二が川原のホームレス……いや、冬廣麻都香の元夫である、梅<sup>つが</sup>池宏忠<sup>いけひろただ</sup>に暴行を受け死亡した事件から、五年が経過していた。今日は、あの日のように酷い寒さで、外の世界は雪化粧をしていた。家で飼っている猫も外には出ようとせず、床暖房の上でぬくぬくと過ごしている。

冬廣麻都香は、どたどたと階段を上っていく。

「英吾！ いい加減起きなさい」

部屋で眠っている東岸英吾<sup>とうがん えいご</sup>の部屋の前で、麻都香が叫ぶ。

「起きなさいって！」

「うるさいなあ！」

「ごそごそと、布団が擦れる音がする。恐らく、また布団へもぐり、夢の中へと落ちていったのだろう。」

一体、いつから彼はこんなにも怠け者になってしまったのだろう、私の教育が間違っていたのだろうか、彼に対する愛が足りないのだろうか、などと朝から思考を巡らせる。

東岸英吾は、小さい頃は素直で、行儀の良い子だったはずなのに、人間という生き物はどう成長するか分からないということを、麻都香は身をもって味わっていた。

彼の部屋を後にして、麻都香はキッチンで朝食の準備を始めた。

卵をフライパンに割り、レタスをちぎり、コーヒーの粉末をカップに入れ、トースターに食パンを入れる。毎日変わらない動作。

目玉焼きが完成すると同時に、新しい父親の東岸敦司とうがん あつしが寝ぼけ眼をこすりながら起きてきた。青い、縦じまの寝巻を着たままで、髭ひげが顔中を覆っている。

麻都香は、あの事件の時に親切にしてもらった敦司と再婚した。

瑛二が死に、生きる希望などすべてを失った時、敦司が慰めの言葉をかけてくれた。乾ききった心に、敦司の潤いをもたらす言葉がじわりと染み込んだ。

麻都香も、敦司も離婚歴があつたために、互いの傷を舐めあうには最適の組み合わせだった。それに、家庭内暴力で悩んでいたという点もまったくもって同じだった。それに加えて、結婚する前からある程度の交友関係があつたからか、結婚までの道のりはいたってスムーズだった。もちろん、敦司に子供がいることも知っていたし、以前住んでいた我が家に遊びに来たこともあつた。

「おはよう、麻都香。あいつはまだ起きてこないのか？」

「ええ……。起こしはしたんだけど」

「仕方のない奴だ……。まったくあいつだけは出来損ないだよ」

敦司は椅子に腰かけ、テーブルに置いてあつた朝刊を手を取って読みはじめた。麻都香は「あなたからも言つてよ」と言おうとしたが、気分を害されるのも嫌なので、その言葉は吞み込んでおいた。もう、離婚というつまらない理由で子供を巻き込みたくはなかったし、英吾への愛がその制止をより強くした。

トーストが出来上がり、ほろしゅん芳醇な香りがキッチンに満ちている時、

英吾は起きてきた。彼もまた、父親の敦司と同じように目をこすりながら、それでいて不機嫌そうな顔で起きてきた。やはり、子供は父親の背中を見て育つのだろう。

「あ、英吾、朝ごはんよ」

「いらない。もう時間ないだろ」

とてもではないが、親にきく口ではない。苛立つ気持ちを抑えながら、あくまで温厚な口調で言う。

「朝ごはんは大事ななのよ？ 食べなきゃ」

「時間がないって言ってるんだよ！ さつさと着替え持ってこいよ！ 遅刻しちゃうだろ！」

「お前っ！ 母さんになんて口をきくんだ！」

朝刊を投げ捨て、敦司が襟元を掴み、ものすごい剣幕で怒鳴りつける。だが、決して殴りかかるうとはしなかった。それは、敦司の信念でもあった。

英吾は反抗的な目つきで敦司を睨みつけている。

麻都香は、慌てて止めに入る。

「やめて、あなた！ ごめんね、英吾。お母さんが悪かったから……。お願いだからやめて……」

お互いが舌打ちをしてから、英吾は解放された。彼は、鋭い目で両親をさらに睨みつけ、去って行った。

「お前が甘やかすからこうなったんだぞ？」

「そうかもね……。ねえ、あなた？」

「なんだ？」

新聞から目を離さずに、敦司が答える。

「今度の休日にも、家族で遊びに行かない？ ずっと、家族で一

緒にいたことなんてないし、それに――

「馬鹿。俺が忙しいことくらい知ってるだろう。お前らに構ってや  
っている暇なんてないんだ。まったく、朝から気分の悪い……」

「ごめんなさい、敦司さん……」

自嘲気味に麻都香は笑い、着替えを取りに行くことにした。

櫥ひのきで出来たクローゼットの中から制服を取り出し、引きこもって  
いるだろう、憎たらしく成長した息子の元へと持っていく。途中の  
廊下がやけに軋み、我が家の老朽化を、身をもって感じた。

再婚すれば、きっと私は幸せになれる。麻都香はそう確信してい  
たのだが、現実には決して甘いものではなかった。真の姿はというと  
ただただ残酷なだけで、ちっとも幸せではなかった。

経済状況こそ改善され、麻都香は専業主婦でいることができたが、  
息子が非行にはしることにより、その尻拭いに追われてしまうこと  
になった。

敦司はというと、仕事人間で夜遅くまで勤務しているし、休みの  
日も、彼には一切かわらなかった。そんな日々に、麻都香は嫌気  
がさしていたが、また離婚という決断をすれば、今度は更に生活的  
に困窮こうきゆうすることだろう。

こんな境遇に耐えられるのは、これも、それも英吾への愛があっ  
てこそのものであった。麻都香は、敦司の心遣いに惹かれて結婚した  
のではなく、その子供である英吾のために結婚したのだった。瑛二  
に味わわせた寂しさを二度と繰り返させない為に。

仮に、敦司に英吾がいなかったとすれば、間違いなく再婚はして  
いないし、したとしても即離婚するという末路を辿ったことだろう。  
もしかすれば、自殺という道を選択していたかもしれない。今まで  
の生きる目的は、瑛二の死という形で終わっていたのだから。

麻都香は、過去のトラウマの疼きを抑えながら、息子の部屋の扉をノックする。右手には綺麗に畳まれた黒い制服と、黄色い手袋が持たれている。

「そこ、置いていてよ」

扉すら開けずに答えている。

「お母さん、手袋作ったから、これ着けて行ってね」

「あー、分かったよ」

言葉からも分かるほどに面倒臭そうだ。時間がないと言いつつも、きっと部屋の中で新しいゲームをプレイしているのだろう。その証拠に、中から電子音が絶え間なく聞こえてきている。遅刻せずに学校へ行く気など、初めからないことを麻都香は知っている。

「行ってくるぞ！」

階下から敦司の声が聞こえたので、返事をする。

「行つてらっしゃい。今日も遅くなるの？」

声なんて聞こえていない。

都合の悪いことから目は逸らし、自分の作りだした心地好い世界に陶醉する。それは夫の悪い癖だ。

彼と再婚して、初めのうちはとても良くしてくれたことを、麻都香は鮮明に記憶していた。しかし、ここ何年かの間に愛は冷めきってしまったのか、最近では性交渉すらない。会社が忙しいということとは重々承知しているが、こんな生活には耐えられなかった。

キッチンへと戻り、朝食の続きをとる。ゆつくりと咀嚼しながら食べていると、朝のワイドショーで八時が知らされた。もう今から学校へ行こうとも遅刻することは確定だ。しかし、英吾は今も階上から降りてこない。

いい加減にしなければ、と椅子から立ち上がった時、階上から彼は降りてきた。制服をきつちりと着込み、しっかりと手袋をしていた。さすがに、そこまで薄情には育っていなかったようだ。そして、英吾は無言で出ていった。

あの時瑛二が着けていたものと同じ、黄色い手袋。

懐かしい過去の記憶に浸り、あの時の貧しいながらも幸せだった、瑛二に愛されていた季節を思い出す。

たった一つの手袋のために血まみれになった瑛二。麻都香は、彼が愛おしくてならなかった。同時に、瑛二の方も麻都香を愛していたのだろう。様々なことを思い起こすと、ほろりと涙が零れ落ちてきた。麻都香はそれを人差し指で拭って、朝食の片付けを始めた。

かちやかちかと、皿同士が擦れ合う音だけが響く。

ぼつつとしながら、瑛二のことを思い返す。

あの時、誰と川原へ行くつもりだったんだろう。

それは、麻都香の五年前からの疑問だった。それに、瑛二が危険だと言われ続けていた川原へ足を運んだ理由も分からない。分かっていることといえば、彼の手袋が片方無くなっていたことだけだった。

瑛二は手袋が燃やされたと言っていたが、どうにも釈然としなかった。なぜ、わざわざ燃やす必要があったのだろうか。放り投げれば済む話ではないか。そこまでして手袋の存在を消したかったのはなぜなのだろう。元夫の性格は、麻都香が一番よく知っている。そこまで深く考えて行動するタイプではない。



皿の割れる甲高い音で、麻都香ははっと我にかえる。

足元を見ると、フローリングに割れた皿の破片が飛び散っていた。

もやもやとした気持ちを抑え、破片を拾う。

そういえば……。

今日は短縮授業だったということを麻都香は思い出した。昼ごろには帰宅するはずなので、昼食を用意しておかなければならない。きっと、朝食を食べていないのでよく食べることだろう。

麻都香は冷蔵庫の中を確認して、買い出しをする必要がないことを確認した。

時刻は十時。彼が帰ってくるまでに掃除を済ませたかった。その後には、ついて来るかは分からないが、彼を連れて瑛二の墓参りに行こうと計画していた。

麻都香は、居間中の埃をはたきで落として回り、手際よく掃除機をかけ始めた。すると、ぬくぬくと過ごしていた猫が驚いて跳ね上がり、開け放していた窓から飛び出していった。その、あまりの慌てぶりに麻都香は微かにほほ笑んだ。

掃除機は旧式で、未だに紙パックを装着して使用するものだった。麻都香は、紙パックの中身に注意しながら掃除を続ける。フローリングを雑巾で丁寧に磨くことも忘れない。

「そういえば、英吾、最近部屋を掃除していないわね」  
掃除機を担ぎ上げ、麻都香は英吾の部屋へと向かう。

彼の部屋の前に立った時、麻都香は不思議と胸が痛んだ。勝手に掃除をしても良いものだろうか、と。今まで、英吾自身から入室を禁じられていたために、麻都香は一度も彼の部屋に入ったことはなかった。

このまま去った方が良いのだろうか。

麻都香の心の中で葛藤が始まる。天使はプライバシーを守れと言  
い、悪魔は息子の健康のためだと誘惑した。

結局、葛藤は悪魔が勝利した。

麻都香は今まで触れることのなかったノブに手をかけ、ゆっくりとそれを下におろした。

中に入った瞬間、麻都香の顔は歪んだ。

部屋の中は、ひどい臭いだった。男性特有の皮脂と汗の匂い、そして精液の匂い。それらが混ざり合ったこの臭いは、何とも形容しがたかった。それだけではなく、英吾は見られないと分かっているからなのか、成人雑誌も放り出していた。普通、然るべき場所に隠しておくものだろう。

布団も黄ばみ、至る所に埃が溜まっていた。テレビも、ゲーム機の電源もつけっぱなしだ。麻都香はその電源を切り、まずは布団を干すことにした。

窓を開き、新鮮な空気を部屋中に満たす。それから、布団を持ち上げると、多量の埃が舞い上がり、麻都香の肺を汚していった。麻都香は力一杯にそれを担ぎ、窓の方へと持っていった。

ベランダに布団を干して、それをはたいていると、道路に小さな子供を連れた女性がいた。仲良く手を繋ぎ、昼食について語り合っ

ている。二人はとても幸せそうで、麻都香は、瑛二がいた頃の生活を思い出した。

あの頃は、本当に幸せだったなあ……。

目をこすり、麻都香は掃除を再開する。

と、布団のあった場所を見てみると、何やら手帳のようなものが五冊放置されていた。どうやら、布団の下に敷かれていたようである。麻都香はそれを手に取り、中身を覗いた。

日付は二〇〇五年の一月二四日から始まっている。

日記帳か。

この日は、瑛二が死んだ日？

ゆっくりと頁を捲<sup>ぺじ</sup>って（めく）いた手が、どんどん早くなる。

読み進めていくと、嫌な汗が止まらなくなった。

麻都香は、日記を一通り読み終えると、掃除を中断して居間へと戻った。

それどころではなかった。

心臓が高鳴り、息が荒くなっていた。

見てはいけないものを、麻都香は見てしまった。

時刻は十三時前。そろそろ英吾が帰宅する時間だ。もはや、この後のことなんて、頭の片隅にもなかった。麻都香は、心臓が飛び出

しそうになるのを抑えつつ、何とかして気を紛らわせるために、昼食の準備を行った。だが、昼食の支度をしている間も、気分は落ち着かなかった。

直に帰宅すると思っていた英吾は、昼の二時を過ぎても帰宅しなかった。どこかで遊んでいるのだろうか、麻都香は心配でならなかった。

あの時の瑛二も、こうやって中々帰ってこなかった。それで、重い腰を上げ、やっと見つけたと思ったたらあの結果だった。なぜ自分はもっと早くに警察へ連絡して、瑛二を救い出すことができなかったのか、悔やんでも悔やみきれなかった。けれども、今さらそんなことを考えても遅い。

麻都香は、小さくため息をつき、料理にラップを被せた。

？ 冬廣麻都香（２）

2

ボオン、ボオン、ボオン、ボオン……。

彼が帰宅しないまま、十八時を知らせる音が鳴った。テーブルに置かれた料理は冷え切り、まるであの時の瑛二のようだった。

冷たくなり、抱きしめれば熱いほどの体温はどこにもなく、触れるだけで恐怖するほどの冷たかった。もう二度と味わいたくはない。

それから三十分ほどが経過した時、玄関の扉が開いた。やっと帰ってきた、そう思ったが、帰宅したのは敦司だった。すっかり疲れた顔をしている。やはり、敦司に息子のことを一任することは避けた方が良さそうだった。何か一つ刺激を与えれば、すべてが崩れ去ってしまいそうだった。敦司には、何も頼れない。

「今年は、墓参りに行ってないのか」

「今日はそれどころじゃなかったわ」

背広を受け取りながら、麻都香が答える。

「あいつはまだ帰ってきてないのか？」

ネクタイを緩めながら麻都香に訊ねる。

「今日は早いつて言ってたのに、心配だわ」

「心配なら、探しにでも行くか？ あの時みたいに暴力事件に巻き込まれているかもしれん」

敦司のその無神経な言葉に、麻都香は思わず戦慄した。考えたくないことだった。また尊い命が危険に晒されるのかと思うと、震え

が止まらなかった。

「じゃあ、私が見てこようかしら」

「やめとけ、やめとけ。冗談だよ。あんなことは滅多に起らないもんだ。心配するだけ無駄だよ。黙って、座って待ってよう。そう  
だ、コーヒーでも飲めば落ち着くかも知れないぞ」

「そうかしら……」

腑<sup>ふ</sup>に落ちない、というような表情を浮かべ、麻都香はため息をついた。

敦司が、こんなにも薄情な人間だとは思っていなかった。血の繋がった我が息子が危険に晒されているかも知れないというのに、なぜこんな呑気なことが言えるのだろうか。麻都香は、心の底から敦司が嫌になった。

「やっぱり駄目！ 私、探してくるわ」

決意を固め、椅子から立ち上がった時、電子音が鳴った。

「はい、冬廣……申し訳ありません、東岸です」

今日はいつにも増して過去を思い出していたせいか、どうにも旧姓と間違えてしまう。

『A警察署の者です。夜分遅くに申し訳ありません。おたくの息子さんが傷害事件に巻き込まれてね。一度、署まで来ていただけませんか？　そこで詳しい事情をお話しましょう。受付で甘利と言えば通してくれますので』

言うだけ言って、甘利という刑事は電話を切ってしまった。たとえ切られなかったとしても、麻都香にはまともに答えられるだけの

力はなかった。

体から血の気が引いていき、麻都香はその場に倒れ込んだ。

「おい、麻都香！ 一体どうしたんだ」

敦司が麻都香の元へ駆けつけ、体を支える。

「傷害事件に巻き込まれたって……」

「あいつがか！」

麻都香は小さくうなずく。

さすがの敦司も、驚きを隠せないようだった。

「俺が行こうか？」

「ううん、私が行ってくるわ」

そう言っていると、麻都香は白いコートを羽織って家を出ていった。母は強し、というべきか、麻都香の足取りはしっかりとしていて、まるでさっきの衝撃など感じていないようだった。きっと、衝撃よりも子を想う力の方が強いのだ。それがたとえ、血の繋がっていない子供であっても。

夜の外気は異常に冷たく、ちらほらと雪まで降り始めている。路面が凍結しているので、滑らないように歩かなければならなかった。このような状況で、ますますあの時を思い出した。

瑛二が暴力事件に巻き込まれて、彼女が東岸敦司の家へ搜索を依頼しに行った時と、まったく同じ気持ちだった。違うことと言えば、家の所在くらいのものだ。

幸い、A警察署は近所にあり、そこへ辿りつくまでの間に怪我をするというような無様なことはなかった。受付で甘利の名を告げると、取調室という何とも大そうな部屋へと案内された。

その部屋では、不貞腐れた顔をして、そっぽ向いた我が息子がいた。彼の目の前には、火の消された煙草が二本入れられた、銀色の灰皿が置かれていた。

煙草を吸ったのかしら。

取調室の空気は重く、想像していた以上に息苦しかった。

「東岸さんですね？　どうぞ、こちらへ座ってください。私が先程お電話をした甘利です」

甘利という男は煙草を啜えながら軽く会釈をして、麻都香の隣に腰かけた。とても威圧的で、優しい口調の中にも悪を許さない正義が隠されていてそくだ、と麻都香は思った。

「さて……息子さんに言いたいことは山ほどあるでしょうが、まずは私が経緯を説明しましょう」

息を大きく吸い、甘利は説明を始めた。

「東岸英吾くんは、I高等学校の近くにある公園にいたところ、同校の三年生二人に暴行を受けました。そして　これは正当防衛ですが、彼は二人の後頭部を石で打ちつけました。今、彼らは病院で治療を受けています」

「あの……その子たちは、その……助かるんですか？」

「ええ、命に別条はないようです」

それを聞き、麻都香は胸を撫で下ろした。これで、殺人犯にでもなってしまったら、彼の人生の幕は早くも降ろされてしまっただろう。最悪の展開を避けられたことは、かなり大きかった。



「良かった……」

「それですね。とりあえずは、釈放ということになっています。また後日来てもらうことになるかもしれませんが、その時はよろしく願います」

甘利は煙草を深々と吸い、火を揉み消した。

「申し訳ありませんでした……」

深々と頭を下げ、麻都香たちは警察署を後にした。

英吾は、終始無言であった。

？ 冬廣麻都香（3）

3

粉雪の舞い散る外に出た時には、空にぼっかりと薄い黄金色をまとった月が浮かんでいた。雲ひとつ確認できないほど、闇に染まった空は澄んでいた。月の他にも様々な星たちが光を放つが、その光は濁っているように見えた。

「ねえ……英吾。何であんなことをしたの？」

もごもごとしながら、英吾が答える。

「燃やされたから」

「え？」

「せつかく作ってくれた手袋燃やされたから。だから……」

悔しいのか、英吾は拳を強く握っている。

「そうなの……。分かったわ、また作ってあげる」

彼は右手を差し出し、手を繋ごうとする。彼の右手は素手で、牡丹色に染まり、とても寒そうだった。だが、麻都香はあの時の瑛二にしたように、彼の手を握ることはできなかった。

「ありがとう、麻都香さん」

英吾は、今までに見せたことのないような、屈託のない笑みを浮かべた。再婚してから、彼がこんな笑顔を見せたことは初めてだっ

た。

「いい加減、私のことお母さんって呼んでくれないかな？」  
ふう、とため息交じりに言い、言葉の最後をぼやかせる。

「……ありがとう、お母さん」

目に涙を溜めながら、彼は下を向いている。

麻都香は心の隙間に、今は聞くことのできない息子の『お母さん』という言葉を詰め込んだ。しかし、その隙間を埋めるには、あまりにも不完全な言葉だった。偽りの言葉では、麻都香の心は満たされなかった。

闇の支配する空には満天の星たち。瑛二と一緒に眺めていたかったこの空を、今、再婚相手の息子と眺めながら歩いている。この場に瑛二がいれば、彼は一体どう感じるだろう。

手袋のようにずっと二人一緒にいられたら、どれだけ素晴らしいことだろうか。だが、もうそれは叶わぬ夢であり、星に願っても、神に祈っても、未来永劫実現することのない夢だ。今ではもう失われてしまった、あの小さな黄色い手袋のように、永遠に二人は離れたまま、二度と一緒になることはない。

もし、天国というものが存在するならば、きっと瑛二はそこで両方の手袋を嬉しそうに着けていることだろう。

麻都香が亡き瑛二のことを考えていると、何かが崩壊したかのよう、に、幼児退行をしてしまったかのように、突然英吾が泣き始めた。

「どうしたの？」

涙を両手で拭いながら、英吾が口を開く。

「ごめんなさい……」

？ 東岸英吾（１）

1

東岸英吾は、公園のベンチで、手袋を片手に薄ら笑いを浮かべている。何も嬉しいことがあったわけではない。ただ、己の愚かさに笑いが止まらなかった。

夕焼けによつて、歪んだ顔にはでこぼこの影ができ、そんな彼を馬鹿にするかのように烏が啼いている。

人のいない公園で、過去を思い起こす。

冬廣瑛二が死んだあの日のことを。

そして、まわりつく罪惡のことを。

「川原に探検でもしに行こうよ」

それが、冬廣瑛二を危険だと再三言われ続けていた川原へと誘いだした言葉である。川原には、数年前より一人の気狂いの男が住んでいると教師からの通達があり、そこには決して近づいてはいけないと言われていた。

「嫌だよ。ずっと前から近づいちゃ駄目だって言われてるし」

冬廣瑛二の返答はもつともなものだった。しかし、英吾は瑛二の心を動かす手段を知っていた。そんなつまらない規則を容易く破つてしまうほどの。

「あそこにさ、綺麗な石があるんだよ。俺、この前内緒で行ったんだけど、宝石っぽいのが沢山あったよ。それにさ、瑛二のお母さんの誕生日ってもうすぐなんだろ？ それ、プレゼントしたらどう？」

包含している黒い塊は表に出さず、笑顔で英吾は言う。もちろん、英吾の言ったことは、内緒で行ったという部分以外は嘘だ。宝石なんてひとかけらも落ちているはずがないし、確かに気が狂った男が小屋に住んでいた。試しに近寄ってみたところ、凄まじい怒声で追いつ返された。あれは危険だ。

「なんで知ってるの？ お母さんの誕生日が近いって」

英吾は、この返答に窮した。

「あれ？ 前に瑛二が言ってたんだよ？」  
嘘だった。

真実はというと、変態的なまでに冬廣麻都香のことを溺愛している、父、敦司に訊いたのである。敦司は以前から冬廣家で出たゴミを漁り、麻都香の私物を物色するほどに麻都香のことを深く愛していた。麻都香の茶色い髪の毛や、化粧品、下着など、敦司の収集癖は過剰さを増し、ついには生理用品にまで手を出したほどだ。

離婚の原因は妻による子への暴力だと、敦司は言い続けているが、実際は変質者の敦司に、妻の方が愛想を尽かしたのだろう、と英吾はずっと考えていた。なぜなら、彼自身には母親から暴力を振るわれた記憶などないからだ。それどころか、英吾は母親から深く愛されていたことを覚えている。記憶にはないが、体がそれをしっかりと覚えていた。今では感じることでできない、母親の愛を冬廣麻都香という一人の女に、英吾の母親は奪われたといっても過言ではないのだ。しかし、英吾は麻都香のことを恨みはしなかった。むしろ、憎しみの矛先は父親である敦司に向けられていた。

そんな英吾のことなど考えもしない敦司は、麻都香が離婚をしたという話を聞いた途端に、アピールを仕掛けた。金銭的な援助をし、相談にも乗り、仕事場までの送り迎えまでした。もちろん、その間

もゴミ収集は欠かさなかったし、情報もしつかり仕入れていた。我が子である英吾を使って、だ。

しかし、今のところその恋が実ということではなく、せいぜい、親切な近所さんというレベルの話だった。麻都香が真実を知れば、一体敦司はどういう目で見られるだろう、と想像するだけで背筋がぞくぞくした。英吾もまた、父と同じくして変質者なのかもしれないかった。

「そうだった……」

怪訝<sup>けげん</sup>そうな顔をして、瑛二が戸惑う。

「そうだよ。で、どうする？ 行く？」

「んー……英吾も来てくれるんだよね？」

「もちろん。俺たち、親友だろ？」

親友だろ？ そんな言葉を口にする奴ほど相手のことを親友だなんて思っていない。英吾にとって瑛二は、麻都香を手に入れるための道具でしかなかった。少なくとも、瑛二の家庭が崩壊した後からは。

「じゃあ、行く！」

ぱつと明るい表情になり、無垢な笑みを浮かべる。英吾も一緒に笑うが、その笑顔は時間の経過した血液のようにどす黒かった。

「じゃあ、今日授業が終わったら行こう。ちよっと家で準備があるから、先に川原へ行っててくれよ。それと、このことは誰にも内緒だからな！」

「うん、分かった！」

時刻は十五時と少し。

？ 東岸英吾（2）

2

川原へ一緒に行く気など、英吾には最初から微塵もなかった。

英吾は帰宅すると同時に、隣家である冬廣家を窺った。ちょうど、英吾の自室から瑛二の部屋が少し覗き見られるのだ。瑛二は嬉しそうな面持ちでリュックに道具を詰め込んでいた。その少し奥では、敦司が愛してやまない麻都香が、台所に立って何か作業をしていた。その姿をじっと見つめていると、水筒に液体を入れ始めたので、ようやく作業の意味が分かった。愛する我が子が、外で凍えないようにという配慮だ。それを受け取り、リュックに詰め込む瑛二の笑顔に、英吾は嫉妬の炎を燃やした。

しばらくすると、瑛二がリュックを背負って出ていこうとしたが、麻都香が呼びとめたようで、何やら口を動かしている。麻都香は箆笥から黄色い手袋を取り出して、瑛二に手渡していた。あれは、手作りなのだろうか、と英吾は反射的に思った。そして、英吾は手に持っていた市販の手袋を握りしめ、嫉妬を強めた。

瑛二が家を飛び出していった後、英吾は物思いにふけた。ちらりと見える麻都香を見てはため息をつき、息子のために夕食の下ごしらえをする彼女に想いを集中させた。

ぼうつと麻都香を見つめていると、英吾の下半身は自然と硬直した。



滑らかに流れる髪、程良くついた肉、化粧気のほとんどない細い顔、小さく膨らんでいる乳房。

そのすべてが英吾を魅了した。敦司の話によると、麻都香は現在三五歳であるようだが、そんなものはどうでも良かった。恋に年齢なんて関係ないのだ。英吾は、この感情が何なのか分からなかったが、少しでも麻都香のそばに近寄りたかった。そして、甘い体臭を嗅ぎたかった。

まだ記憶もほとんどない年齢の時に母親と引きはがされた英吾は、女性というものを何も知らなかったし、母親がいることによる幸せというものも知らなかった。しかし、瑛二はそれを知っているのだ。英吾は、それが知りたくてならなかった。

瑛二は、小学校の中でも最貧の家庭である。なのに、瑛二はいつも笑顔だった。服、靴、文房具はぼろぼろで、漫画やゲームになんて一度も触れたことがないのに、常に楽しそうだった。それと対を為すように、英吾の家庭は母親こそいないものの裕福だった。しかし、心に大きく開いた空洞は、金というただの紙切れでは埋まらなかったし、漫画やゲームの幻想に浸れば虚しいだけだった。

心の空洞を埋めるために、英吾は幾度となく麻都香の元を訪ねた。その度に、麻都香は英吾に対して優しく接してくれたし、軽く抱きしめてくれたこともあった。だが、空洞は埋まらなかった。やはり、麻都香という女性を手に入れなくてはならないのだ。

英吾は、時計を確認し、誰もいない部屋から飛び出した。

向かった先は、冬廣家だった。

恐らく、今日冬廣瑛二は川原にいる気狂いに暴力を振るわれ、あ

わよくば殺され、麻都香からあの眩しいまでの笑顔は消え失せるだろう。今日は、その見納めというわけである。もちろん、暴力を振るわれる保証も、ましてや殺される保証もない。しかし、瑛二から麻都香を奪い取るには、これ以外に方法が思いつかなかった。

古ぼけたアパートの二階に、愛しい彼女は住んでいる。階段を構成するコンクリートは罅<sup>ひび</sup>が入っており、所々にゴミが散乱していた。ここに一家が揃って住んでいたのかと思うと、英吾は冬廣家に同情せざるを得なかった。何でも、瑛二の父親は女癖が悪く、ギャンブルに深くのめり込んでいたらしい。だとすれば、父親がいてこの住居というのにも頷ける。

赤い錆の浮いた扉には、インターフォンはついていなかった。英吾は扉をノックする。扉の右上にある換気扇から、生ぬるい風が流れてくる。そして、あたかも友達を呼びに来た、という風な声色を使う。乾いた音の後に、ハープのように澄んだ声が聞こえてきた。英吾は、その声を聞いたたびに心癒された。

扉が開かれると、当然のことながら、さっき覗き見た麻都香その人が現れた。どうやら英吾がここへ向かうまでの間に水仕事をしていたらしく、布のエプロンで手を拭いていた。

「あら、英吾君。いらっしやい」

「瑛二君はいますか？」

「いないことなんて知っているのに、英吾は訊いた。」

英吾は、こうやって嘘がぼろぼろと出てくることに感心していた。「瑛二なら、一足先に出て行ったわよ？ なんでも、探検に行くんですって。誰と行くの？ って訊いても、秘密って言っちゃって。ふふ、お年頃なのかしらね」

口元に手を当て、上品に笑った。

こんなに美しい存在が、こんな汚らわしい場所にいる。美しい女性と、崩れゆく廃屋。あまりにも不釣り合いなその光景に、英吾は少しだけ笑った。それは、ある意味、究極の美への同意なのかもしれない。もしかすると、敦司もこの美しさに気づいているのかもしれない、と英吾は思った。

「そうですか、残念です……」

落ち込むふりをして、麻都香の同情を買った。こうすれば、いつも彼女は必ず家の中へあげてくれた。英吾は、少しでも麻都香の笑顔を心に焼き付け、母親というものの温かさを感じていたかった。

「ちよつと、あがつていく？ お茶がさっき湧いたから、飲んでいて」

案の定、麻都香は英吾を家に招き入れてくれた。

六畳二間の小さな部屋で、入口の近くに台所があった。居間兼瑛二の勉強スペースと見られる部屋は整理整頓が行き届いており、一つ一つの物自体は汚らしいが、それでも見苦しくは見えなかった。

逆に、英吾の住んでいる家といえば、最新の家具や、綺麗なフローリングが張り巡らされているものの、敦司は掃除が嫌いなためにそれらすべてが霞んで見える。整理されている物といえば、麻都香の私物くらいのものであった。

英吾が居間でそわそわしていると、麻都香が茶を持ってきた。

「ほうじ茶だけど、どうぞ」

「ありがとうございます」

英吾は、早速ほうじ茶に口をつけた。

「熱っ」

苦さよりも何よりも、熱さが英吾の舌を襲った。さすがに、ここ

までは予想していなかった。

「あら、大丈夫？」

麻都香は英吾の隣に座り、様子を窺っている。

英吾は、自分の体に、微弱な電流のようなものが流れたことを感じた。憧れの母親の体がすぐそばにあり、やろうと思えば、今すぐにも彼女に抱きつくことのできる距離まで近寄っている。想像とまったく同じ、首筋から香る甘い匂いに、英吾は深い感慨を覚えた。しかし、今まで、丸い座卓を挟んでしか接近したことなかった英吾は、緊張で体が硬直してしまった。こんなチャンスは滅多にないのに。

「あ、大丈夫です。ちょっと舌を火傷しただけです」

慌ててその場を取り繕う。

「ふふ。そういうおつちよこちよいなところ、瑛二とそっくり。あの子もね、つい最近お茶で舌を火傷したの」

「そうなんですか？」

麻都香は小さく頷き、ころころと笑った。

こんな他愛のないことで笑える家庭とは、どんなに素晴らしいことなのだろうか、と英吾は思った。いや、これは一般的な家庭であれば当たり前のことなのだ。しかし、英吾にはその当たり前がない。これは、どれだけ悲しいことだろうか。

その当たり前が、自分だけのものになる時を想像すると、嬉しさで身が震えた。もちろん、それを手に入れるためには冬廣瑛二が死ぬだけでは不十分だ。もう一段階上へ進ませなければならぬ。何もかもが不確定なこの計画は、子供ならではだ。

しばらくの間、英吾は母親の優しさと温かさに触れ続けたが、そ

の間、瑛二が今どうなっているのか、知りたくて仕方がなかった。もうあの男に襲われているだろうか。彼が襲われてからが、英吾の計画の始まりなのだから。

「すみません、そろそろ塾があるので帰りますね」

「あら、そう？　またいつでも遊びに来てね」

名残惜しい母の愛を残して、英吾は瑛二の様子を窺いに、川原へと繰り出すことにした。

？ 東岸英吾（3）

3

東岸英吾が川原へと向かう時には、周囲はかなり暗かった。住宅街では電灯が灯りはじめ、ちらほらと帰宅してきているサラリーマンが見られる。子供たちも、暖かな我が家へと帰っていく。

そんな中、英吾は急ぎ足で川原へと歩を進めた。目的地へと近づくにつれて胸が躍り、人が死ぬかも知れないというのに気分は高まっていく一方だった。友人の死よりも、己の欲望が満たされることの方が強かった。

川原へと辿りつくとき、英吾は瑛二の辿ったであろう道を、堤防の上から辿って行った。

列車の通る橋を抜け、しばらく行ったところにある橋の下で、二つの人影を確認することができた。

目を凝らしてみると、小さい方が冬廣瑛二で、もう片方が例の男であることを認知できた。

二人は何やらもめており、瑛二が一步、また一步と後ずさっていた。男の方かというと、怒声を飛ばして、小さな子供を威嚇していた。

ここまで都合よくいっているとは、予想していなかった。確かに、英吾はすべての事柄がうまく運ぶことを渴望していたが、いざうまく事が運んでいると、思わず戸惑ってしまう。しかし、英吾にもう

まくいく保証がなかったわけではない。なぜなら、英吾は、あのホームレスの男が瑛二の父親であることを知っていたからだ。

冬廣瑛二の父親、つがいけひろただ 梅池宏忠は八年前、妻と離婚した。彼は、離婚調停から人生が崩れ始めた。

妻がいなくなった途端に、彼のリミッタが外れ、以前にも増して女遊びやギャンブルに手を染めるようになった。それらは一度はまりこめば容易く抜け出せるものではなかった。

貯金が有り余るほどあった最初は良かった。しかし、時が経つにつれて、砂の山が崩れるかのごとく貯金はなくなり、それに伴って女も彼から遠ざかっていった。その腹いせにギャンブルに打ち込むが、結果として借金だけが残ってしまった。そうして首が回らなくなり、今に至るわけである。

ではなぜ、それで息子である瑛二を恨まなくてはならないか。その理由は、ただの逆恨みであろうと英吾は考えている。歪曲して物事を考えるならば、麻都香さえ家庭環境に満足していれば離婚せずに、今まで通りリミッタが取り付けられた状態でいることができたのだ。当然、その離婚の原因となった息子へも、憎しみの矛先が向くわけである。

その情報源もまた、東岸敦司だった。

英吾がのんびりと言い争う光景を眺めていると、瑛二が走り去って行った。思わず目を見開き、計画の失敗を悟った。本来ならば、ここで瑛二は何らかの形で傷を負うはずだった。だが、瑛二は傷一つ負わずに去っていったしまった。梅池も、黙って小屋へと戻ってしまった。

英吾は斜面を下つていき、二人が言い争っていた場に、血の一つも流れていないことを確認した。

やっぱり駄目か……。

ふと足元に目をやると、黄色い手袋が無造作に放り投げられていた。これは、窓から覗き見ていた時、瑛二が麻都香から手渡された手袋に違いなかった。

欲しくて仕方がなかった手袋が、今日の前にある。

英吾は、それを黙ってコートのポケットに押し込むと、また急な斜面を一気に駆け上った。

麻都香の作った手袋を手に入れただけで満足を得た英吾は、元来た道を辿った。すると、何やら川原の方に細長い光と、丸い光の二つが輝いていた。暗闇の中で目を細めて見ていると、瑛二がまた戻ってきていた。手袋を探しにきていることは容易に察することができた。

英吾は、またそこでしゃがみこむ。

瑛二が草むらの方を探索していると、梅池が小屋から出てきた。

瑛二が梅池の存在に気づく。

何やら話しているが、川の流れる音が邪魔して聞きとれない。

瑛二が梅池に殴りかかった。



殺してやる！ という声が微かに聞こえる。

英吾は戦慄した。自分が奪ったこの手袋が、瑛二を狂気へと駆り立てたのだ。ポケットに押し込まれた手袋をぎゅっと握りしめ、ただただ獣のように荒れ狂う瑛二を見つめた。瑛二が攻撃していたのはほんの数秒だったが、英吾には数時間にも感じられた。

今度は、瑛二が殴られている。

自分の思っていた展開。

寸分違わぬ展開。

自分が望んでいたはずなのに、その光景はおぞましかった。

見ているだけなのに血が引いていくような感覚に襲われ、体が震えて仕方なかった。決して寒いからではなく、声も出せずに、一人の命が消えようとしている今に恐怖していたからだった。ぬいぐるみのようにただ為されるがままで、もう死んでいるのではないかと思うほどだった。

もうやめてくれ！ そう叫ぼうとした時、あの愛しい麻都香が、敦司を連れて瑛二を救い出した。梅池は敦司に羽交い絞めにされ、身動きが取れないようだった。

英吾はそれを見て胸を撫で下ろしたが、ぴくりとも動かぬ瑛二を目にして、また鼓動が速くなった。

麻都香が瑛二の手を握りしめている。

がつくりと左手が垂れ下がり、動く気配すら感じられなかった。

麻都香は、赤ん坊のような大声を出して泣き叫んでいる。

英吾は、胸が張り裂けそうな思いに駆られた。

ただ、母親の愛が欲しかったただけだったのに。

ただ、瑛二のように手を握ってほしかったただけなのに。

たったこれだけのことで、こんな思いをするくらいなら、始めからやらなければ良かった。そう思うが、すべては手遅れだった。

冬廣瑛二は、搬送先の病院で死亡が確認され、東岸英吾に残ったのは、悔恨の念と、小さな黄色い手袋だけだった。

それから数年後、東岸敦司と冬廣麻都香は結婚した。

これも、英吾の想像していたことだったし、望んでいたことだった。結婚してくれば、麻都香は自分の母親となるのだから。これで、英吾が欲していた母親も、そして愛も、両方を手に入れた。

しかし、英吾の心は満たされないでいた。麻都香から注がれる愛情は偽りであることを英吾は悟った。それに気づいた英吾は、日に日に非行にはしるようになった。

だが、どれだけ暴れても、どれだけ両親に当たり散らしても、ただ麻都香の愛が遠のくだけで、何の意味もなかった。時が経過すればするほど、英吾は愛を感じられなくなっていった。

あれだけ欲しかったはずのものが、いざ手に入ってみると、ただの塵と化すとは、あの時は思いもしなかった。遠くから眺めている時は眩く輝く宝石だったのに、触れてみれば、それはただのまやか

しに過ぎなかった。英吾は、幻のために瑛二を殺してしまった。

後悔の海に沈む度に、英吾はあの時拾った手袋を握りしめて、謝った。

親友だと偽って、騙して殺してしまって、麻都香を奪って、手袋を拾ってしまって……。

思えば、あの手袋さえ英吾が拾っていなければ、瑛二は無事に帰宅できたのだ。あの日の英吾の行動すべてが瑛二を殺した凶器だった。

英吾は、年を取るにつれて子供の頃の純粋な心、嫉妬、欲望などの感情が剥がれ落ち、ただの罪、後悔、絶望、恐怖を包含する心になってしまっていた。あの時の純粋な心でいられたら、どれだけ気が楽だっただろうか。

今では、麻都香の顔を見ることすら辛い。

楽になりたい。英吾は本心からそう思った。

？ 東岸英吾（4）

4

瑛二が殺された日から、丁度五年の月日が経過した。

その日も、いつもどおりに麻都香が彼を起こしにきた。本来ならば感謝しなければならないのに、英吾は麻都香を邪険に扱い、突き放した。機嫌が悪いわけでも、何でもなかった。英吾は、今日が一年のうちで最も罪の意識が最大化される日、つまり、今日が瑛二の命日であることを覚えていた。そんな日に、麻都香の顔を直視すれば、思わず謝ってしまいそうだった。今さら洗いざらい白状したからといって、自分の罪が消えるものではないことは、重々承知していた。

躰を起こすことが億劫おっくうだったが、着替えを取りに行かなくてはならなかった。制服は大事に一階のクローゼットにしまわれている。

部屋を出て、ゆっくり階段を下っていくと、居間の方から話し声が聞こえた。

「あいつはまだ起きてこないのか？」

「ええ……。起こしはしたんだけど」

「仕方のない奴だ……。まったくあいつだけは出来損ないだよ」

気に食わなかった。再婚することができたのを自分の力だと思い込んで、お高くとまっている。小さな頃から好かなかったが、今はその時以上に嫌っている。

英吾が今に顔を出すと、何とも気まずそうな表情をして、麻都香が口を開く。

「あ、エイちゃん、朝ごはんよ」

食欲なんてなかった。

「いないよ。もう時間ないだろ」

時間なんて関係なかった。

「朝ごはんは大事なのよ？ 食べなきゃ」

「時間がないって言うてるんだよ！ さっさと着替え持ってこいよ！ 遅刻しちゃうだろ！」

そんな汚い言葉を吐くつもりなんてなかった。

「お前っ！ 母さんになんて口をきくんだ！」

父、敦司が英吾の胸倉を掴んだ。英吾は反抗的な目つきで父親を睨みつける。この行動だけは、彼の本心からくるものだった。

「やめて、あなた！ ごめんね、エイちゃん。お母さんが悪かったから……。お願いだからやめて……」

麻都香さんは悪くない！ そう言おうと彼女を見たが、言えなかった。その悲しそうな顔が、冬廣瑛二の死亡した時の彼女の顔と重なった。後数秒彼女の顔を見ていれば、きっと英吾は泣いていた。

敦司から解放された英吾は、着替えを持ってくるように麻都香に言うだけ言って、部屋へと戻った。

階段を上っている最中、また癪に障る言葉が囁かれていた。

「お前が甘やかすからこうなっただんだぞ？」

「そうかもね……」

悪いのは全部お前だ！

舌打ちをして、英吾は自室に閉じこもる。

英吾の部屋は荒れていて、高校で貰ったプリントや書類などが部屋中に散乱していた。布団も、ずっと干していない。そんな中で、唯一片付けられている物が、瑛二の手袋だった。

テレビの電源を入れて、ゲーム機を起動させる。適当なディスクを入れ、プレイデモを流す。音だけ聞けば、ゲームをプレイしているように感じるだろう。

英吾は本棚に置いてある小さな木箱の中から、あの時、瑛二と離れ離れになった孤独な手袋を取り出して、それを両手で握りしめ、泣いた。何年もこうして泣いてきたからか、涙の染み込んだ手袋の色は褪せて、毛糸もほつれてきていた。

しんしんと泣いていると、扉がノックされた。涙を見られるわけにはいかない。

「そこ、置いといてよ」

震えそうになる声を抑えながら答える。

「お母さん、手袋作ったから、これ着けていってね」

「あー、分かった分かった」

一刻も早く、麻都香には去ってもらいたかった。

もう、幾度となく彼女は手袋を作ってくれていた。その度、英吾は手袋を引き裂き、しばらくはそうしたことを黙っておき、追及されたら答えることにしていた。英吾にとっての手袋とは、瑛二の残したそれしか有り得なかった。

それからしばらく泣いた後に、家を出て行くことにした。

学校へ行くことが面倒でなかったが、さすがに、このまま家にいるのは気不味かった。なぜなら、このまま部屋に籠っていたとすれば、麻都香と顔を合わせる危険が高まるからだ。そうなることは避けたかった。

制服を出来る限りきちんと着て、麻都香手製の手袋を無理矢理に装着する。そして、学校指定鞆を背負って、また階下へと降りて行った。

玄関へ向かう前に、麻都香の憂い顔が覗き見られた。今にも泣きだしそうで、少し触れただけで壊れそうな気さえした。英吾は、彼女が心配でならなかったが、敢えて無視をして出て行くことにした。

家を出ると、英吾は手袋を外し、それを引き裂いた。手袋は瑛二の物以外に有り得ないと言ったが、手袋を引き裂く理由は何もそれだけではなかった。

あの手袋は、サイズが瑛二の物と一緒にだった。

高校生である英吾に、小学生が着けるような手袋が合うはずもない。そのことは麻都香も理解しているだろう。しかし、麻都香はそのことをまるで知らないかのように、毎回同じ型の物を作り続けている。

麻都香は無意識に瑛二のサイズに合わせて手袋を作っていた。

忘れられないのだ。あの愛しい息子のことが。

今でも、彼女は梅池によって奪われたと思っっているだろう。それ

に、英吾が関わっていることを知れば、彼女の気は狂ってしまうだろう。

英吾は、手袋を引き裂いた罪悪感と、騙しとおしている今に絶望しながら、当てもなくぶらついた。

部屋から持ってきた瑛二の手袋を握りしめながら、ふらふらと。



？ 東岸英吾（5）

5

十六時。英吾は沈みゆく夕陽の光で、はっと我に返った。

英吾は、結局一日をこの公園で過ごした。この公園は、高校からも距離があり、自宅からも相当な距離があるし、知り合いに出会う確率もかなり低かった。ましてや、家族に見つかる心配など霞程にもなかった。

ちらほらと帰宅する学生が見られる。彼らは例外なくほほ笑み、放課後という自由時間を満喫しようとしている。

彼らの中の、一体何人が英吾と同じように、人に決して言うことのできない秘密があるのだろうか。恐らく、一人としてそんな人間はいないだろう。

英吾には、あの汚れない笑顔が憎らしかった。できることならば、今すぐにでも彼らの顔を一人一人叩き潰して、俺は人殺したんだ、と叫びたかった。英吾を抑えるものがなければ、実際そうしていただろう。衝動を抑えていたのは、あの手袋だった。

ベンチに座って、黄色い手袋を見ていると、自分の愚かさには笑いが込み上げ、涙があふれて仕方がなかった。涙を抑えるためにぎゅっと目を瞑るが、まったくの無意味だった。まぶたの隙間から熱い液体があふれ出し、止まらなかった。涙は頬を伝い、口へと侵入していく。夕陽が、視界を赤く染める。

と、その視界が急に暗くなる。

英吾は急いで涙をぬぐう。そして見上げてみると、髪を金に染め、制服をだらしなく着込んでいる男子学生が二人、英吾の目の前に立っていた。彼らは英吾のクラスの一員だった。だが彼らは、下等な生物を見下すかのような目で英吾を見ている。

「何か用かよ」

不快感を露わにして、英吾が言う。

「おい、英吾。今日が何の日だったか分かってんのか？」

「知るかよ」

「テストだよ！ お前、昨日カンニングさせてやるって言ったじゃねえか！ お前が来なかったせいで散々だったぜ！」

彼らの言ったことは真実だった。英吾は、昨日に答案を見せてやると、安請け合いをしていた。それを頼りとしていたのか、彼らは一切対策を講じていなかったようだ。

「そりゃあ悪かった」

「謝って許せるわけねえだろう。もう赤点は確定、留年も確定だ。どうしてくれんだ？」

「自業自得だろう」

英吾は鼻で笑い、その場を立ち去ろうとした瞬間、学生のうちの一人が英吾を細かい砂の集まった大地へと押し倒した。英吾は後頭部を大地に打ちつけ、鉄の味を味わった。そして、その拍子に手袋が落下した。

英吾に怒声を浴びせていた男が手袋を拾い上げる。

「だっせえ手袋だな。こんなの着けてんのか？」

「そんなもん、俺の勝手だろ。放っとけよ」

「おい、あんまり反抗的な態度取ってんじゃないよ？」

人一倍臆が大きいであろう男が、英吾を後ろから拘束した。あまりの圧迫感に、英吾は思わずむせ返った。内臓が徐々に押し潰されていくようだ。

「本当にだつせえ手袋……」

手袋を拾い上げた男は、まじまじとそれを眺める。

「おい……触れんなっ！」

「反抗的。これ、大事なんだろう？」

男は英吾の前にしゃがみこみ、目の前に手袋をちらつかせる。

「約束を守れなかった英吾君には、お仕置きだな」

そう言つと、男は懷から煙草を取り出し、点火した。そして、ゆっくりと煙を吐き出すと、煙草を手袋へと押し当てた。

「やめろ！」

じわじわと、手袋に火が移り、黄色い手袋が揺らめく炎と共に消え去っていき、黒い灰が音もなく崩れている。

炎が勢いを増していく。

瑛二の、麻都香の、そして英吾の手袋が燃える。

英吾の網膜に、ゆらゆら踊る炎が焼きつく。

手袋がただの灰となるまで、五分もかからなかった。

涙が、ダムが決壊したかのように流れてくる。

「おい、こいつ泣いてるぜ」

押し掛かっていた男が英吾から降り、彼を見下してけらけらと笑った。不愉快で、殺したくなる。

「俺を裏切るところなるんだよ！ 覚えとけ！」

二人が背を向ける。

英吾は気づかれないように立ち上がり、手近に落ちていた石を拾い上げる。

ゆっくりと男たちに近づいていく。

そして重く、凹凸おつとつの激しい石を男たちの後頭部へと。

耳を劈くきり（つんざ）慟哭ごうく。

発せられない言葉。

崩れ落ちていくからだ軀。

醜い血。

動かない四肢しし。

僕は……。

？ 東岸英吾（6）

6

次に英吾が見た光景は、眩しい赤い光を放つ、白と黒の混じった車と、血だまりの中で顔を突っ伏している二人組だった。二人ともびくびくと軀を痙攣<sup>けいれん</sup>させ、必死に生きようとしていた。あまりにも滑稽<sup>こっけい</sup>なその光景に、英吾は思わず笑いそうになった。

「君がやったのか？」

突然、青い制服を着た男が話しかけてきた。彼は何やら胸のポケットから取り出し、英吾に提示した。そこには、A警察署、甘利という文字が見られた。どうやら、警察官のようだ。いつの間ここへ来たのだろうか。

「はい」

「君も、すっかりやられたようだね。多分、正当防衛ということになるだろうけど、あのまま彼らを殺していたら、そうはいかなかっただろうね」

「生きてるんですか？」

どうせなら死んでくれればよかったのに、と心の中で毒づいた。

「ああ。死ななくて良かったと思うがな。その腕章を見るに、君はI高校の二年生だろ？ これからの進路に影響しないように、穏便

な対処をしてもらえらるだろう」

「そうですか。それはありがたいですね」

まるで、人を殺そうとしたことに、何も感じていないかのように冷徹な表情を浮かべ、英吾が答える。

今回は、瑛二を間接的に殺したことは、訳が違った。彼らの無防備な後頭部に石を打ち付けることに、何の躊躇い（ためら）もなかったし、殴り倒した後も、眉ひとつ動かさず、まつ毛の一本も揺れなかった。

きつと、あの時梅池に襲いかかった時の瑛二も、英吾と同じ気持ちだっただろう。梅池をあの時、殺してしまっていたとしても、何の後悔もなかったはずだ。それどころか、快感すら覚えたかもしれない。

英吾は甘利に連れられ、警察車両でA警察署へと連行された。

？ 東岸英吾（7）

7

取調室で、英吾は待機させられていた。

避けられないことだとは分かっていたが、いざ親を呼ばれるとなると緊張した。しかし、ここに訪れるのは敦司であることは分かっていたので、麻都香が来るよりも心は安定していた。

麻都香は、今日、瑛二の墓参りへと行く予定なのだった。墓自体は近所の霊園にあるので時間はかからないが、彼女は墓参りに行く、と、決まっただけで夜遅くに帰ってくる。だから、今この時間に麻都香がここへ駆けつけてくる可能性はないと考えた。

電話を終えた甘利が帰ってきた。

「なんであんなことをしたんだ？」

両親のことは一切話をせずに訊ねる。

「大切な手袋を燃やされたんです」

「手袋？」

「現場に落ちていませんでしたか？ 今はもう、灰になっちゃって、と思いますけどね」

皮肉を込め、英吾が言う。

「たったそれだけのことで、あいつらを」

「あなたにとっては、たったそれだけのことでしょ？ でも、僕

にとっては、命を奪われるよりも重要なことなんです」

「理解しづらい話だな」

「でしょうね」

しばらくの間、冷たい取調室を沈黙が支配する。

「でも……その気持ち、解らないでもないな」

小さくため息をつき、甘利が煙草に火をつける。

「そういえば、俺は、昔おやじに作ってもらった竹馬を壊されたことがあるな。あの時は悔しかったね。今のお前と、似たような感情だったと思うよ」

「あれは、僕のものじゃないんです」

「なに？」

「あれは、僕の親友の手袋なんです。冬廣瑛二って名前を聞いたことがありませんか？ 五年前、ホームレスから暴行を受けて、小学生が殺された事件」

「ああ、聞いたことがあるな」

苦虫を噛み潰したかのような顔をして、甘利が答える。

「その被害者の子が持っていた手袋なんです」

甘利が煙を吐き出す。

「なるほど……。その手袋は、形見みたいなもんだったってことか」

「形見、ですか。そう言えばそうかもしれないですね」

「そりゃあ、怒るわな。少しだが、お前に同情するよ。……どうだ？ 煙草を一本吸ってみないか？ ちよつとは気が紛れるかも知れん」

「貰います」

青い箱から煙草を一本取り出して、英吾に差し出した。英吾はそ



れを啜え、慣れない手つきで火をつけた。すうつと吸い、そのまま青い煙を吐き出した。肺に入れば咽る（むせ）ことを英吾は知っていた。

煙草の先で小さく光る赤い塊を見ると、手袋が燃えていく様を鮮明に思い出すことができた。できることならば、あの時、自分も一緒に燃え尽きてしまいたかった。そうなれば、今頃、すべての罪から解放されていたはずなのに。

英吾の持っていた煙草がすっかり灰になり、甘利が二本目の煙草に火をつけた時、英吾の親が取調室に入ってきた。

英吾の予想は裏切られた。

そこには、墓参りに行っているはずの麻都香がいた。麻都香は、瑛二が死んだ時と、寸分違わぬ表情をしていた。目を真っ赤にして、髪を振り乱し、美しさが完全に枯れ果てた顔。

英吾は、必死になって麻都香から目を逸らした。

そんな英吾を無視して、甘利が経緯を説明している。

ちらり、ちらりと麻都香の様子を横目で窺う。彼女の表情は、ほとんど曇っていく一方だった。目の端には涙を溜め、今にも泣きだしそうだった。こんな義理の息子に、ここまで親身になってくれている麻都香に、英吾は心から嬉しさを覚えると同時に、今までに感じたことのないほど巨大な罪悪感に襲われた。

「そういうことなので、今日は帰っていただいて結構です」

「はい、ご迷惑おかけしました……」

説明が終わったようだ。麻都香がぺこりと頭を下げ、礼を言う。

「さ、行きなさい」

甘利が英吾の背中を押す。

「エイちゃん、行こうか」

麻都香が、足早に取調室を去っていく。それに遅れないよう、英吾もついて行く。その時、英吾が見た麻都香の背中、ひどく寂しげだった。あの時から何も変わらない、あの背中。

何故自分を責めてくれないのか。

何故自分を愛してくれているのか。

いつそのこと、この場で刺殺してくれればどれだけ楽か。

英吾には、何も分からなかった。

もう隠すことはできない。

もう、あの背中を、あの顔を見続けることはできない。

英吾は、真実を話す決意をした。

？ 東岸英吾（8）

8

粉雪が舞い、外はあの時以上に冷え込んでいた。空には、寒さで震えるかのように輝く星が無作為に並べられている。

「ねえ……英吾。何であんなこと……」

警察署の前で麻都香は立ち止まり、純粹な瞳を英吾に向けた。

「燃やされたんだ」

「え？」

「せっかく作ってくれた手袋を燃やされたから。だから……」

英吾は、悔しそうに拳を握る。

「そうなの……。分かったわ、また作ってあげる」

その言葉が、ひどく英吾の心に染み渡り、思わず泣いてしまいうだった。しかし、今はまだ泣く時ではない。

「ありがとう、麻都香さん」

必死に笑顔の仮面を被り、感情を偽った。

「いい加減、私のことお母さんって呼んでくれないかな？」

「……ありがとう、お母さん」

英吾の言葉に、麻都香が屈託のない笑みを浮かべる。

もう限界だった。仮面に罅が入り、端からぼろぼろと崩れ落ちていく。その崩壊は、もはや誰にも止められない。

「どうしたの？」

麻都香が心配そうに英吾の顔を覗き見る。

「ごめんなさい……」

「どうしたのよ」

麻都香は英吾の肩を持ち、崩れ落ちそうになる彼を支えた。

「僕が……僕が瑛二を殺したんだ」

英吾は口ごもり、時に咽こみ（むせ）ながら、すべて、包み隠さずに麻都香に語った。五年前、川原に誘い込んだことも、瑛二に嫉妬していたことも、手袋を奪ったことも、麻都香のことを愛していたことも、母親の愛が欲しかったことも、燃やされたのは瑛二の手袋だったことも、すべて……。

「謝って許してもらえとは思ってないんです……。でも、僕はもう耐えられないんですよ！　ずっと、麻都香さんの悲しい顔を見続けることなんて、僕にはできない……」

完全に崩壊した仮面の下から出てきたのは、悲しみをモチーフにした、道化師の顔だった。涙は、薄く積もった雪の上に流れ落ち、少しずつ足元の雪を溶かしていく。

麻都香に、今すぐ殴り殺されても、何も文句は言えない。ぐっと力み、来る暴力に備えた。しかし、それは無意味な行動だった。

「知ってたわ」

まったく予想もしていなかった言葉が、麻都香の口から飛び出してきた。てつきり、呪いの言葉が囁かれるとばかり思っていたのに。

ぼろぼろと涙をこぼしながら、麻都香を見上げる。涙で視界が霞み、彼女の表情が読みとれない。

「私ね、今日英吾君の部屋で日記を読んだわ。あの時、瑛二は手袋を燃やされたって言ってたけど、違ったのね。本当は英吾君が帰っていたのね」

すべて、見通されていた。

「全部読んだの？」

「ええ、五年分、全部読んだわ」

日記には、冬廣瑛二が死んでから五年間の間に起ったこと、自分が感じたことなどを一切合財書き記していた。これを読んだということは、英吾のすべてを知ったということに等しいのだ。しかし、すべてを知った上でも、麻都香は英吾を責めようとはしなかった。

「だったら、何で」

「英吾君を今さら見捨てられるわけじゃないじゃない！」  
声を荒げ、麻都香は目に涙を溜めている。

「私たちは……間違っても親子なのよ？ 日記を読んだ今だからこそ、親として、あなたを救わなきゃいけない」

それと、と麻都香が続ける。

「死んでしまった人を生き返らせるなんて不可能なんだから。子供のあなたを恨んでも仕方ないって思ったの。それに、実際に手を下したのは、私の元夫なんだから」

「じゃあ……許してくれるの？」

麻都香は、ゆっくりと顔を左右に振る。

「ううん、許せない。私は、死ぬまであなたを許せない」

「やっぱり……」

英吾は肩を落とし、その場に崩れ落ちた。

「ねえ、英吾君。ここで話し続けるのも良くないわ。ほら、警察の人が見てる……」

二人の数十メートル後ろでは、若い警察官が二人をさつきからじっと見つめている。明らかに不審者として見ている。

「場所を変えましょう。そうだ、あの公園がいいわ。この時間なら、人はそんなにいないでしょうし」

麻都香は英吾の手を取り、歩を進める。

？ 東岸英吾（9）

9

麻都香と英吾は、目的地である公園へとやってきた。

この公園は、最近できたばかりで、遊具や、中央に設けられている噴水など、何から何まで美しく、汚れの一つもなかった。休日などは家族連れで賑わい、一度ここへ来れば、荒んだ心も癒されるというものだ。

しかし、今は人気がなく、どこか物寂しい雰囲気にも包まれていた。

今年の春には一斉に咲き誇るであろう桜も、今はただの枯れ木にしか見えず、何とも言い難い裏を垣間見ることができた。まるで、咲き誇った後、一斉に散る桜は、現在の東岸家のようであった。

「僕はどうすればいいんだよ……」

冷たく、凍えた両手で熱い頭を抱える。涙は止められたものの、またいつ泣いてしまつか分からないほど不安定な状況に、英吾は陥っていた。

思えば、自分が冬廣瑛二に嫉妬をしたところから、すべてが始まったのだ。もう、あれから五年もの月日が流れてしまっている。今さら、麻都香に罪が許される道理もなかった。もう、英吾にはどうして良いか分からなかった。

頭が痛んだ。

胸が押し潰されてしまいそうだった。

今すぐにでも、舌を噛み切ってしまいたかった。

けれども、できなかった。

死というものの恐ろしさを、瑛二から教わってしまったから。

きっと、瑛二も怖かっただろう。

冷たかっただろう。

苦しかっただろう。

なのに僕は。

歯を食いしばり、英吾は己の顔を引つ掻いた。爪が顔の肉に食い込み、鋭い痛みがはしった。だが、そんなものは瑛二の味わった苦しみの、麻都香が味わっている悲しみの一部にも相当しないことは英吾も分かっていた。しかし、自傷行為はやめられなかった。

もう一度顔に手をやろうとすると、麻都香の温かい手によって制止された。缶を落とす、乾いた音と共に。

「まったく、少しでも目を離すところだね？」

英吾は、麻都香の手の暖かさに、また涙が込み上げてきた。それをぐっと耐え、顔を強張らせた。

麻都香は、石のタイルに落とした二つの缶を拾い、その一つを英



吾に手渡した。ほんのりと暖かく、幾分か英吾の心を楽にした。

プルタブを引いて蓋を開け、口をつけ、少しだけ中の液体を飲んだ。

「熱っ」

缶よりも、中身が熱いことに頭が回っていなかった。

「英吾君、あの時と変わってないね」

麻都香はにつこりほほ笑み、英吾の頭を撫でた。

「確か、あの時が瑛二の死んだ日なんだよね。英吾君、ちつともそんな汚い部分を見せないから、私本当に気づかなかった」麻都香は、缶コーヒーに口をつける。「本当に……私、気づかなくて……」

「麻都香さんのせいじゃない!」

英吾は麻都香の両肩を掴み、じっと眼を見つめた。

麻都香は、零れ落ちる涙を拭いながら言った。

「私ね、こうやって瑛二と一緒に語らいをすることが夢だったの。でも、私は働くことで精いっぱい、ちつとも瑛二と遊んであげられなかった」

「僕のせいだ」

麻都香は英吾の言葉を無視して続ける。

「でも、瑛二が死んで、次は英吾君が子供になった。英吾君は、私の生きる目標を奪っておいて、私に生きる目標を与えたわ。私、精いっぱい目標を達成しようと思った。こうやって、公園に来て、家

族で遊んで、瑛二とできなかつたことを……常に子供と心を通わせ  
ていたかった。でも、敦司さんの、あの家族を想う心じゃ、それは  
実現しないんだなって思ったの。もちろん、その否は私にもあるわ」

「僕が……」

「罪を抱えているのは、あなただけじゃない。私にも、瑛二を守れ  
なかつた、そして英吾君をこんな風にしてしまった罪がある」

明らかな強い意志を持った目で、麻都香はしっかりと英吾のこと  
を見据えた。

「英吾君。あなたは、どうしたい？」

「僕は」

身を切り裂く風が吹く。

「私には、親としてあなたを救う義務があるわ。だから……」

麻都香は、隣に座り込んでいる英吾に顔を近づけ、小さく呟いた。

「だから、私と一緒に」

？ 東岸敦司

午前八時。東岸敦司は目を覚ました。

ベッドの横に手を伸ばし、愛しい妻の体に触れようとする。しかし、既に彼女は起床しているようで、そこからは少しのぬくもりすら感じられなかった。

昨夜夜遅くに麻都香と英吾は手を繋ぎ、肩を並べて帰ってきた。二人は傍から見れば歳の差カップルに見えたことだろう。敦司は、彼女らがここまで幸せそうな顔を見たことがなかった。一体何があったのだろうかと思いつてみたが、何も思いつかなかった。

「なんだ、あいつは休みだっていうのに早起きだな」

寝ぼけ眼をこすりながら、敦司は階下へと降りていく。

家は、異常なまでに静かだった。

普段であれば、麻都香が起きていれば朝食の支度をしているだろうし、英吾は朝早くから部屋でゲームをしているはずだ。しかし、そのどちらの音も聞こえてはこない。

あまりに静かすぎる空間に、敦司は身震いした。

居間を覗いてみるが、やはり誰もいなかった。

「なんだよ、二人揃って出掛けてるのか？」

自分の声がやけに反響する。

ふと玄関の方に目をやると、鍵が開いていた。昨晚、麻都香と英吾が帰ってきた時に締め忘れたのだろうか、それとも、今朝出掛けた時に締め忘れたのか。

玄関の戸を開けてみると、外は清々しい、良い天気だった。こんな日には、家族で出掛けるに限る。

「最近、ずっと家族サービスをしていなかったし、今日はお出掛けかな……。そうだ、近所に最近できた公園にでも行こうか」

思えば、敦司はここ数年、家族サービスというものをしていなかったし、麻都香にも迷惑をかけっぱなしだった。英吾にいたってはほとんど会話すら交わしていなかった。きっと、二人ともいい加減に愛想を尽かしていることだろう。崩壊が訪れる前に、それに気づくことができたのは上出来だと、敦司は思う。今日は、一日を家族の為に使おうと思った。

ふと、足元を見てみると、そこには英吾の右手の手袋と、麻都香の左手の手袋、そして、英吾の手袋と同じ型をした小さな手袋が、丁度手を繋ぐようにして重なって落ちていた。

「なんで、こんなところに……」

敦司は三つの手袋を拾い上げ、ポケットへとしまいこんだ。そして、もやもやとした気持ちを払拭するかのようにつつした。

「早くあいつら、帰ってこないかな。さっさと出掛けないと、人で

いっぱいになるぞ。一体どこに行ってるんだ」

敦司は、ぶつぶつと独り言をつぶやきながら、家の中へと戻っていった。彼の頭の中には、二人が喜ぶ姿以外の不純物が一切含有されていなかった。

自分自身の記憶に、己が殺人犯になったという不純物が入り込んだことなど、彼は永久に気づかなかったのである。

？ あなた

「四人は皆、人を殺してしまった」

なんて悲しいんだろう。

「殺すと言っても、いろいろ種類がある」

社会的に、物理的に……。

「そうだね。君はよく分かっている」

二人はどうなったんだろう。

「さあ……。僕には何も分からない」

誰が、誰を殺す結果になったんだろう。

「それも、僕は知らない」

私たちの知らないところで、こんなにも酷いことが。

「それが現実だよ」

死者が人を殺す。

「それが最も悲しい」

生者が人を殺す。

「皆、気づきはしないけれどね。皆人殺しだ」

人は皆、本能的に人を殺したいのかな。

「きっとそうだろうね」

人は、死を望んでいるのかな。

「朽ちていくものへの憧れがあるだろうね」

私たちは、何なんだろう。

「その答えは、一生出ない」

分からない。

「僕たちは殺人犯、そして自殺志願者。これだけが真実だ」

じゃあ私も死のうかな……。

「それはいけない。本能に従って生きては駄目だ」

何で？

「それが人間という生物だからだよ。殺さなければ生きていけない」

ふうん……。

「さあ、疲れただろう？ ゆっくりお休み」

うん。ありがとう。

私は、私たちが、一人の殺人犯であることを記憶に留める。

そうして、私はそっと目を閉じた。

(了)



？ あなた（後書き）

Who killed him？ はこれにて完結となります。  
ここまでお付き合いいただき、ありがとうございました。

余談になりますが、この作品の真犯人は誰だと思いましたか？  
英吾、瑛二、麻都香、敦司。

誰が誰を殺す結果になったと思いますか？

正直、私自身も決めかねていますし、判断が付きません。  
是非とも真犯人を考えてみてください。

それでは。

読者の方と、創作活動を愛するすべての人に感謝と敬意をこめて。  
また、次回作でお会いしましょう。  
お疲れさまでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2880p/>

---

Who killed him ?

2010年12月20日12時35分発行